

3月7日「受難を選ぶ」マタイ福音書 16章 13～28

今日の物語を聴きながら、皆さんはこんな疑問を抱かなかったでしょうか。「ペトロってそんなに悪いこと言ったかな？」イエス様の宣教の働きはすごい勢いで広がって、いろいろなところで注目を浴びるようになってきました。人々は噂しています。「イエスは凄い預言者じゃないのか?」「旧約聖書に登場するエリヤやエレミヤの生まれ変わりではないのか?」イエス様と弟子たちの宣教の働きは順風満帆、上り調子に見えました。弟子たちもイエス様のことを本当の救い主メシアであると信じ、告白するようになりました。そんな人気絶頂の時に、イエス様は言い出したのです。ご自身が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺される、と。「はいそうですか、じゃあ勝手にエルサレムで死んでください」なんて弟子が言うはずがありません。弟子たちは耳を疑ったでしょうし、ペトロが「主よ、とんでもないことです！そんなことがあってはなりません！」そう諫めようとしたのは普通の反応だと思うのです。ところが、イエス様は自分の身を案じ、心配してくれるペトロに向かって叱責を始めました。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」ペトロは何か悪いことを言ったのでしょうか？イエス様は何に怒ったのでしょうか・・・

この物語を読みながら、思い出したエピソードがあります。私の通っていた高校で、外部ゲストを招いての講演会がありました。ゲストには発展途上国で学校を建設して子どもたちに教育を行う NPO で働いている方が来られました。何十年も前なので、その方の名前とか、どの国での働きか、などの細かなことが思い出せないのですが、講演の内容はかなり衝撃的だったのでよく覚えています。普通、こういう講演では、子どもたちの将来を輝かせる素晴らしい仕事だとか、笑顔が生きがいととか、いわゆる“良い”話をされると思います。けれども、その方は、ご自身の働きを非常にむなし、ほとんど意味のない働きだと言われたのです。発展途上国で頑張っ
て子どもたちのために学校を建て、教育をする。でも、ほとんどの子どもたちはあまりの貧しさのために、勉強がきちんと身に就く前に、親に働き

に出される。中には、親に身売りさせられてしまう子もいる。ある町では順調に教育が進んでいた学校がテロリストの標的にされて子どもたちが全員攫われた。男の子は殺害や盗みを教え込まれてテロリストの一味にされ、女の子は売られてしまった。命の危険を顧みず、どれだけ頑張っても感謝されることも、報われたこともなかった・・・とその方は語ったのです。会場全体がシーンっと静まり返ったのを覚えています。講演終わりの生徒からの質問で「一番大変なことは何ですか？」と問われた時に、その方はこう答えられました。「今です。こうして日本に帰ってくると講演の依頼がある、中にはNPO 法人のアドバイザーになりませんか？大学で教えませんか？などととても待遇の良い仕事のお誘いもある。今の仕事を辞めて、それらに就いた方がどれだけ楽かといつも考える。そのような誘いを断って現地に行くのが一番辛いです・・・」

今日のイエス様も同じだったのではないのでしょうか。誰が好き好んで十字架にかかるのでしょうか？いかに神の子救い主とは言え、イエス様だって十字架で処刑なんてされたくはなかったのです！イエス様は大体 30 歳前半だったそうです。ちょうど私が同じ年代ですが、今、世界を救うために十字架にかかれと言われても「はい、喜んで！」とは到底言えません。家族のこと、教会のこと、保育園のこと、やり残したことが多すぎます。イエス様も本当は断りたかったのです。十字架の前の夜のことを思い出します。イエス様は弟子たちに「死ぬばかりに悲しい」と本音を漏らされました。そして神様に祈られます。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください！」

それでも、イエスは続けてこうも祈られます。「しかし、わたしの願い通りではなく、御心のままに・・・」イエス様は決して望まなかった受難の道を、御心に適う道と信じて、歩むことを決められたのです。ペトロはイエス様を止めます。「主よ、とんでもないことです！そんなことがあってはなりません！」それは人間としては普通のことでした。しかし、神の御心とは離れたことだった。そしてそれはイエス様の決意を揺るがすことだった。だから、イエス様は怒ったのです。「サタン！引き下がれ！」このイエス様の決意を聴くとき、私たちにとって十字架の重みが変わってくるよう

に思います。イエス様は私たちの罪のためにご自身の命を投げ出して私たちを救ってくださいました。それは軽い命ではなくて、もっと生きたかった、もっとこの世でやりたいことがあった、たくさんの思いを抱きながらも、私たちのために投げ出してくださった命だったのです。

もうすぐ、東日本大震災から 10 年を迎えようとしています。私も何度か、被災地に行きました。岩手県の津波をかぶった地域にある新生釜石教会との交流に行ったときに、被災された方の辛い経験をお聞きました。とある、足の悪い高齢の方はこんな話をされました。彼女には近くに暮らす息子さんと孫がいました。息子さんと、孫は、地震後すぐに津波に気付いて高台に逃げる事が出来ました。しかし、ご自身は足が悪く、逃げるのを諦めて家におられたところ、息子さんが気付いて、すぐに助けに向かったのです。彼女をおぶって逃げた息子さんは、間一髪のところで、お母さんは逃がすことはできました。けれども、ご自身は津波に飲みこまれて亡くなってしまったというのです。彼女は、今でも（当時震災から 1 年半くらいでした）目の前で息子が津波に飲まれる姿を何度も夢でみるそうです。いつもご自身を責めます。「どうして自分なんか生き残って、息子が死んだのか」「自分が死ねば良かった」泣きながら語る彼女に私はかける言葉も見つかりませんでした・・・

もし仮に皆さんの命を救うために誰かが命を落としていたとしたらどうでしょう？きっとこの女性と同じように何度も何度もその人のことを思い出すでしょう。なぜ、自分は生かされているのか、この命にどれほどの意味があるのか、問いが頭を駆け巡るでしょう。悔やんでも悔やみきれない悲しみに苛まれることもあるでしょう。それでも、与えられ、もはや自分だけの命ではなくなったその命を、その人の分までしぶとく生き続けようとするのではないのでしょうか？イエスが私たちに代わって十字架にかかられたとはそういうことなのです。

イエスは言われます。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」それは単に生きる上での苦難や

苦しみを負うとか、罪を負うということではありません。どう生きることが救い主の命に報いることなのか考え続けることなのです。主イエスが本当は成し遂げるはずだったこと、成し遂げなかったことを、思いながら、私たちが代わりに神の国を成し遂げようと決意することなのです。私たち一人一人に与えられている命とはそれほどの重みのあるものなのです。

教会ではよく献げる生き方というのが取り上げられます。奉仕すること、他者のために献ること、それはキリスト教の一つの根幹であり、大切なことと考えられていますし、私もそう思っています。けれども、そこに更に（日本的な？）謙遜も相まって、私たちは自分自身の命を軽くみてしまう傾向がないでしょうか？自分のことはどうでも良い、さて置いて、となっていないでしょうか。今日、私は、イエス様はまずあなたのために命を奉げられたのだ、ということ皆さんと改めて共有したいと思います。他の誰でもない、あなたのために、そして私のためにです。だから、私たちは自分自身の命も決して軽く考えてはならないのです。自分の価値を決して低く見積もってもならないのです。だって、それはかけがえのない救い主の命によって買い戻され、贖われた命だからです。だから私たちは、自分たちの命を大切にします。自分たちの価値を信じるのです。自分の命を丁寧に生きるのです。イエスの言葉はとても偉大です。「隣人を自分のように愛しなさい」単に他者を愛するのではなく、自分と同じように愛する・・・と言うことは、自分を愛せない者は、他者を愛せないということです。自分を精一杯大切にしたい上で、同じように他者の命を重んじるのです。特に命の価値が本当に低くみられる時代です。レントの時期に、私たち一人一人がイエスによって贖われ、新しく与えられた命にもう一度目を向けたいと思います。